

佐伯地区医師会

おたふくかぜについて

おたふくかぜはムンプス・ウイルスによる感染症です。いわゆる「風邪」は鼻腔・咽頭の炎症ですが、おたふくかぜの標的は唾液腺で、左右の耳の下・顎の下・舌にある唾液腺が腫れて「おたふく顔」になることに由来します。片方だけで終わる場合もあります。

唾液にいるウイルスでうつり（接触感染・飛沫感染）、接触後2～3週間で発症しますが、2～3割は発症せずに終わります。発症後、唾液に出ているウイルスは5日間で減りますので、腫れが残っていても5日後には登校・登園可能です。

発症すると、唾液腺が腫れて痛く、食べるのが苦痛です。発熱は半数くらいです。抗ウイルス薬はありませんが、1～2週間で自然に治ります。

ときどき合併症があり、多いのは髄膜炎（すいまくえん）で、頭痛と嘔吐を生じますが、数日でおさまる後遺症は

ないようです。問題は、難聴で千人に一人と言われ、起こると回復には難渋します。俗に睾丸がやられて不妊になるといわれますが（精巣炎）、実際に不妊になる例は稀です。

ワクチンは任意接種で有料のため、接種する人が増えず、流行が止まりません。実は27年前に麻疹・風疹・おたふくかぜ混合ワクチンを導入しましたが、髄膜炎の合併症が多く出て、中止しています。現在、副作用の少ないワクチンを開発中で、これができて定期接種になれば、おたふく風邪は見られなくなるでしょう。現時点では、お金を払ってワクチンを接種することが、難聴を避ける意味でもおすすめです。

わき小児科医院
院長 脇 千明